

尼崎市に於ける夜間中学生の実態（続）

雀 部 猛 利

四、雇用関係と就労条件

(1) 勤務先の業務と規模

夜間学級に在席する生徒が昼間勤務している場合には、その勤務先の業務形態はもちろん尼崎市における産業の特殊性によって或る程度の制約を受けるのは当然であるが、男子が勤務する事業所の業務形態は小売業、鉄工業、製函業が主であり、女子の場合には機械器具製造業、製函業に勤めるものが多い。第一表はその勤務先の業務形態を示したものである。

(第一表)

勤務先の業務形態

性別 業務形態	男	女	計
鉄工業	4(16.7)		4(10.9)
機械器具製造	2(83.3)	5(38.5)	7(18.9)
食品製造業	1(4.2)		1(2.7)
化学工業		1(7.7)	1(2.7)
製靴業	1(4.2)		1(2.7)
製函業	4(16.7)	3(23.0)	7(18.9)
飲食業	1(4.2)		1(2.7)
小売業	5(20.8)	1(7.7)	6(16.2)
氷・燃料商	1(4.2)		1(2.7)
ガソリン 配給所	2(8.3)		2(5.4)
小運送業			2(5.4)
娯楽施設		2(15.4)	2(5.4)
病院	2(8.3)	1(7.7)	1(2.7)
無回答	1(4.2)		1(2.7)
計	24(100.0)	13(100.0)	37(100.0)

また勤務先の事業所の規模をその従業員からみると、第二表に示す如く、百人以上の従業員を抱えている大企業には僅かに男女とも各二名づつ勤務している程度で、十人未満の零細企業に勤務する

(第二表)

勤務先従業員数

性別 従業員数	男	女	計
1 ~ 3	7 (29.2)	1 (7.7)	8 (21.6)
4 ~ 5	4 (16.6)	2 (15.4)	6 (16.2)
6 ~ 10	7 (29.2)	3 (23.0)	10 (27.1)
11 ~ 20	1 (4.2)	2 (15.4)	3 (8.1)
2 ~ 50		1 (7.7)	1 (2.7)
51 ~100	1 (4.2)	2 (15.4)	3 (8.1)
101~200	1 (4.2)	1 (7.7)	2 (5.4)
200~	1 (4.2)	1 (7.7)	2 (5.4)
無 回 答	2 (8.2)		2 (5.4)
計	24 (100.0)	13 (100.0)	37 (100.0)

ものが二四名で全体の六四・九%にも及んでいる。従って夜間学級にて学ぶ中学生の勤務先の労働条件も、その業務形態や経営規模の程度からみて、或る程度推察することが出来るように、決して恵まれたものとは言えない。

(3) 労務管理の状況と給與

夜間学級の生徒が勤務する事業所の拘束勤務時間を調べてみると、第三表に示す如く、九時間以上が十二名で、全体の三三・五%にも及んでいる。それにも拘らず、勤務中の休憩時間が一時間にも満たないものが全体の六二・一%に相当する二三名にも達している。(第四表)

また年次休暇制度をもつような事業所に勤務するものが皆無で、定休日すら持たない事業所に勤務するものが四名もいる。また定休日を設けている事業所の場合でも、その約半数のものが職人等のように、月のうち二回以内の定休日しか与えられていない事業所すら存在する。このような状態であるから、当然住込勤務のものも多く、全体の約三分の一に相当する一六人が住込みで勤めながら夜間学級に通う中学生である。而も住込先には家事使用人が皆無である事業所が全体の八割にも及ぶという状態である。このような諸条件から言って、夜間学級の中学生が如何に劣悪な労

偽条件のもとに於て偽きながら、夜間學級に通っているかが伺われる。このことが彼等の肉体的な發育にどれほど重大な影響を与えているかは、彼等の血色と榮養によつても充分理解される処である。第五表から第八表までは住込み勤務の事情を示したものである。

更に驚くべきことは、彼等が殘業を要求されながら、殘業手当も支給されないような事業所に勤務しているものが二一名もあり、全体の五六・七%を占めている。

(第三表) 勤 務 時 間

時間 性別	8 時 間 以 内	9 時 間 以 内	10 時 間 以 内	11 時 間 以 内	12 時 間 以 内	不 定	無回答	計
男	4 (16.6)	9 (37.5)	4 (16.6)	3 (12.5)	1 (4.2)	2 (8.4)	1 (4.2)	24 (100.0)
女	9 (69.2)	3 (23.1)	1 (7.7)					13 (100.0)
計	13 (35.1)	12 (32.4)	5 (13.6)	3 (8.1)	1 (2.7)	2 (5.4)	1 (2.7)	37 (100.0)

(第四表) 休 憩 時 間

時 間 性 別	30分以内	1 時 間 以 内	1 時 間 以 上	不 定	無 回 答	計
男	2 (8.3)	12 (50.0)	1 (4.2)	8 (33.3)	1 (4.2)	24 (100.0)
女	1 (7.7)	8 (61.5)	2 (15.4)	2 (15.4)		13 (100.0)
計	3 (8.1)	20 (54.0)	3 (8.1)	10 (27.1)	1 (2.7)	37 (100.0)

(第五表)

従 業 員 の 内 訳

従業員数 性別	1～3	4～5	6～10	11～15	16～20	21～50	51～ 100	101～ 150	151 以上	計
通 勤 者	10	4	6	1	2	2	3	2	1	31
住 込 者	9	3	2	0	1	1	0	0	0	16
計	19	7	8	1	3	3	3	2	1	47

(第六表)

勤務先の家事使用人数

使用人 生徒の性別	無 し	1 人	2 人	計
男生徒の勤務先	2 0	3	1	2 4
女生徒の勤務先	1 0	3		1 3
計	3 0 (81.0)	6 (16.2)	1 (2.2)	3 7 (100.0)

(第七表)

住 込 先 の 家 族 数

家族数 生徒の性別	2 人	5 人	6 人	計
男生徒の住込先	1	4	2	7
女生徒の住込先	1		1	2
計	2	4	3	9

(第八表)

住 込 状 況

居室 性別	独 居	従業員と 同 居	家 族 同 居	無 回 答	計
男	2	3	1	1	7
女	1			1	2
計	3	3	1	2	9

(第九表)

賃 金 支 給 日

支給日 性別	月 一 回			計	月 二 回		計	不定	無回答	計
	1 日 (2日)	25日 (26日)	30日		1日と 15日	15日と 30日				
男	2	1	13	16	2	3	5	2	1	24
女	1	3	9	13						13
計	3 (8.1)	4 (10.8)	22 (59.5)	29 (78.4)	2 (5.4)	3 (8.1)	5 (13.5)	2 (5.4)	1 (2.7)	37 (100.0)

(第十表)

残 業 手 当 の 支 給

手当 性別	無	時 間 給	出来高払	無 回 答	計
男	16 (66.7)	5 (20.8)	1 (4.2)	2 (8.3)	24 (100.0)
女	5 (38.4)	6 (46.2)	2 (15.4)		13 (100.0)
計	21 (56.7)	11 (29.8)	3 (8.1)	2 (5.4)	37 (100.0)

労働基準法は、義務教育年令にある児童の育成を保障し児童の人権を擁護するという見地から、就労者の最低年令を規定し、満十五才に満たないものは原則として労働を禁じている。けれども、社会的、経済的諸事情を考慮して、その仕事は児童の心身に害を与えない限りに於て、その修学時間外に、その修学の時間を合せて一日七時間以内の労働であるならば、労働行政機関の発する使用許可の証明を得て、この年令層の児童を使用することを許しているのである。また労働基準法は、年少労働者に対する保護労働条件を規定し、労働形態に於ける封建的遺制を排除して、年少労働者の人権を確立させるために、年少者の労働意志を認める制度をとっている。更にまた労働時間、休日および深夜業に関する規定をもうけて、年少労働者の保護を考慮している。年少労働者は自分自身の生長のために大きなエネルギー消費を必要とする時期であるから、外部から大きな労働負担を負わすことは、彼等の心身の成長にとって重大な悪影響を与えることになる。従つて満十五才以上十八才未満の年少者には厳格な八時間制を採用し、成年労働者のように時間外労働、休日労働、非工業的企業における特例は、原則として年少者には適用されない。また年少労働者に対しては週休をたてまゑとしており、休日の労働は許されない。その他休憩時間についても、労働時間が六時間を超えると四五分、八時間を超えると一時間の休憩を与えねばならないことになっている。このような諸規定を考慮するならば、現在の夜間学級に通う中学生が、如何に劣悪な労働条件と労働基準法違反をあえて犯しつつ就学の手段を求めようとしているかが伺われる。この現実を直視するならば、児童福祉や社会保障の立場から、夜間学級が決して望ましい結果をもたらしているとは言えない筈である。学令期にある生徒の不就学を回避するという純教育行政上の立場からのみ、夜間学級を肯定することが如何に危険なものであるか忘れてはならない。

五、夜間学級の諸条件

夜間学級における在籍生徒数、授業内容、担当教諭、出欠席状況、給食状況等について夜間学級をもつ市内五中学

に対して調査表を配布し、夜間学級の運営状況を調査した。その結果からみると、夜間学級には専任の教員がいないこと、在籍生徒の約三割が欠席者であること、給食の施設が無く教室を食堂代りに使用していること、授業が復式学級で行われているため、教育効果の点から充分でない等、いろいろと夜間学級の運営面で改善せねばならない点が多い。

(1) 在 籍 生 徒 数

在籍生徒数の総計は一〇一名であるが、調査日現在における転出、不明等のために調査不能者が九名あったので、この調査の対象となった実数は九二名であった。第一表は夜間学級生徒の性別、学年別、年令別集計を示したものである。このうち、学校教育法第三九条の規定による通常の中学校教育課程として当然昼間に教育を受けるべき生徒が七四名、規定外の生徒すなわち中学校就学適令外のものが一八名であった。そのうちには二〇才以上の女子が二名含まれている。元来、不就学児童とか不就学生徒と言うのは、就学すべきであるのに、就学していない児童、生徒であって、そのうちには、(一)学令者にして学令簿に載っていない者、(二)学令簿には載っているが学令簿に載っていない者、(三)学令簿、学籍簿共に載っているが出席状況の悪い者の三種類のものが含まれている。文部省では従来第一の範疇に属するものを未就学、第二の範疇を不就学、第三の範疇を長期欠席者と称し、それぞれを区分している。このうち第一の未就学者は、今次大戦のため多少は未だ存在するかも知れないが、その実態は捕捉し難い。また第三範疇の長期欠席者は、その概念上から言えば不就学者ではないが、実質的には完全に不就学であるか、或いは程度の差こそあれ、就学困難なもので、謂わば潜在不就学者である。

尼崎市に於ては昭和二十四年には潜在不就学児童生徒が一五〇〇名いると称せられていたが、当時は全国的な傾向としても長欠者の数が多かった。処が昭和二六年四月一日より小田南中学に、翌二六年には大庄東、明倫、城内、昭和の四中学に夜間学級を併設すると共に、不就学生徒や長欠者に対して就学督励を行う訪問輔導員制度を設けた為

に、不就学者や長欠者の数が著しく減少した。

この調査における九二名の夜間中学生の男女比は、女子が六一・一％で過半数を占め、男子は三九・九％であった。このうち学令期にあるものは、男子が八三・三％、女子が七八・五％で、女子の方に学令期を超過した者が多い。また各学年別にその構成をみると、一年生は十三才を超えるものが三名。二年生では十四才を超えるものが十二名、三年生では十五才を超えるものが九名いる。

(2) 生徒の異動と出席状況

(1)、転入学者について

月別転入者数は第二表に示す如く、調査日当日から一ケ年遡って、その状況を見ると、一ケ年間の転入者総数は四六名である。この表からみると、二学期の始まる九月から十、十一月と新学期始めの四月から五、六月というように学期の始まった直後に最も多く、その後は暫時減少している。一般に春と秋に転入者が多く、集

(第一表)

性別、学年別、年令別夜間学級在席者

年令		12	13	14	15	16	17	18~20	21	22	計
区分	男	2	2	1							5
	女	1	4	1	1						7
一年	男		6	4	2	1	3				16
	女		8	8	1	2	3				22
二年	男			8	5	1	1				15
	女			11	9	4	1		1	1	27
三年	男	2	8	13	7	2	4				36
	女	1	12	20	11	6	4		1	1	56
計	計	3	20	33	18	8	8		1	1	92
	%	3.3	21.7	35.8	19.6	8.7	8.7		1.1	1.1	100

中していることは注目すべきである。

(第二表)

月別転入学人数

昭和31年	転入学人数
9月	10
10月	8
11月	3
12月	0
32年1月	3
2月	1
3月	0
4月	8
5月	6
6月	5
7月	2

(四)、転退学者について

一ケ年間の転退学者数は二四名で、そのうち四月と五月に転退学するものが過半数を占め、二月がこれに次いでいる。さきの転入学者と比較すれば、春には極めて移動が多く、また秋は夜間学級の生徒にとって好ましい修学の季節であることが反映している。

(第三表)

月別転退学者数

昭和31年	転退学者
9月	0
10月	0
11月	1
12月	0
32年1月	0
2月	5
3月	0
4月	9
5月	8
6月	0
7月	1

然しながら、過去五ケ年間における不就学者数は毎年減少してはいるが、各年度においては、四月よりも九月、九月よりも翌年一月になるに従って不就学者数は増加して行く傾向がある。第四表は尼崎市教育委員会の資料に依るものである。

(第四表)

過去五年間の不就学者数

昭和32年1月31日現在

年 度	月	4 月 末	9 月 末	1 月 末
28 年	中学校	231(1.81%)	224(1.71%)	277(2.14%)
	小学校	126(0.34%)	187(0.50%)	202(0.55%)
	計	357(0.72%)	141(0.83%)	479(0.96%)
29 年	中学校	194(1.24%)	226(1.44%)	228(1.45%)
	小学校	133(0.34%)	168(0.42%)	181(0.46%)
	計	327(0.59%)	394(0.71%)	409(0.74%)
30 年	中学校	182(1.08%)	183(1.09%)	196(1.16%)
	小学校	115(0.27%)	163(0.38%)	173(0.40%)
	計	297(0.50%)	346(0.58%)	369(0.62%)
31 年	中学校	124(0.69%)	158(0.88%)	217(1.21%)
	小学校	87(0.19%)	145(0.32%)	220(0.49%)
	計	211(0.34%)	303(0.48%)	437(0.70%)
32 年	中学校	128(0.74%)	146(0.84%)	—
	小学校	124(0.27%)	153(0.33%)	—
	計	252(0.39%)	299(0.47%)	—

い、出席状況

それぞれ六一・四％、五七、四％という低い出席率である。兵庫県下における年間平均出席率は七〇・二％であり、全国平均は七三・九％であることと比較するとき、決して良いとは言えない。

(3) 学級編成の状況

夜間学級は市内の五中学に各一学級ずつ編成されているが、何づれも全部複式学級であり、一年、二年、三年を区分せず、各学校とも一学級で全生徒の授業を行っている。一学級の平均在籍者数は二〇・二人であり、最高は明倫中学の二八人、最低は昭和中学の一四人であった。

各学年とも月別の出席状況は、年間平均七〇％前後で、三月が最も出席率がよく、四、五、六月と暫時出席率は低下するが、以後また上昇し、九、十、十一、十二、一、二月と大体横ばい状態である。各学年とも年間出席率は、その生徒の校区環境や地域の実情に応じて著しく差を示している。昭和中学のように住宅地区ではその出席率もよく、年間平均八三・九％という好成績を挙げているのに反し、生活水準の低い階層が多く居住する明倫、大庄中学では、それ

(4) 教員とその給与

夜間学級にて勤務する教員数は全部で二九名いるが、いづれも兼任教員であって、夜間学級の専任職員は一名もない。一名の女子教諭の他はすべて男子の教諭である。

兼任教諭が夜間授業を行うための月額手当は極めて僅かで、学校によっても差があった。

(5)、業 務 内 容

授業の始まる時間は、市立五学級とも六時半であるが、実際生徒が登校してくる時間は、仕事の関係上まちまちである。学校では六時から六時半までに給食を実施している。〔授業の終了時刻は学級によつて多少異なるが、大体八時半から九時頃までに全学級とも授業が終了するようになってゐる。ただし昭和中学と明倫中学は女子の生徒が多い上に、学校の所在地が極めて寂しい場所にある關係上、その終了時間も少し早くしてゐる。従つて一日の授業時間数は二時限乃至三時限であつて、一時限の長さも平均四五分である。〕

一週間の各科目授業時間数は、市内五学級とも複式授業であるから、全学年が同一科目で同一授業を受けてゐる。各科目の授業時間数は第六表に示す通りである。

(6) 教 育 施 設

教室の照明状況は教室の規模や構造等によつても異なるが、大体一教室に螢光灯一二〇W位の照度から普通電灯二四〇W位までの照度である。処が運動場の照明設備になると、一校だけが照明設備をもつのみで、他の四校には全く運動

(第五表)

教員に対する給与状況

月額手当	校 長	教 諭	計
～500円	1		1
円 500 ～ 1,000	2	4	6
円 1,000～1,500	2	20	22
1,500円 以上		5	5
計	5	29	34

(第六表)

教科別週時間数調べ

授業時間 教科目	一時間	一時間半	二時間	三時間	月一回	授業無し
国語		1	2	2		
社会		2		3		
数学	1	1	1	2		
理科	1	1	1	2		
音楽	3	1				1
図工	3					1
職業・家庭	2		2			
保健・体育	4	1				
外国語	2	1	1	1		
ホーム・ルーム	3	1			1	
生徒会	1					1
クラブ活動						1

場の照明がない。
従って体育の授業時や生徒の退校時における照明がないために危険を伴う恐れがある。

(第七表)

照 明 状 況

照明 生徒数	無	20w 6ケ	40w 5ケ	40w 6ケ	60w 4ケ	500w
11 ~ 15人			1		1	
16 ~ 20人		1				
21 ~ 25人				1		
26人~				1		
運動場	4					1

また給食施設については、五学級とも全然給食施設はないが、事実上の給食は実施されている。従って給食婦の代りに使丁がこれに当り、賄室の代りに使丁室が当てられ、食堂の代りに教室または使丁室が使用されている。給食の内容は、毎夕生徒一人当り食パン一四〇瓦（三個）の他にミルク、ミソ汁、バター等を無料で支給され、一人当り約八〇〇カロリーの熱量が摂取されるように計画されている。第八表は各学校における給食施設と給食内容である。

(第八表)

給食施設と給食内容

学校施設		明 倫	昭 和	大 庄	小田南	城 内
食 堂		使丁室	使丁室	教 室	教 室	教 室
賄 室		使丁室	使丁室	使丁室	使丁室	使丁室
給 食 婦		使 丁	使 丁	使 丁	使 丁	使 丁
給食内容	パ ン	○	○	○	○	○
	バター	○		○	○	○
	ミルク	○	○	○	○	○
	汁		○	○	○	

六、結 語

中学校の夜間学級に通学する年少労働者が尙いてい事業所は、一般に前近代的な封建的ないしは原始的労働形態の残骸を留めている場合が多いために、彼等の就学に対してもかなりの負担となる要素を内包している。いまその主なる諸要素を概括するならば、(1)低賃金と低賃金支給

(7) 学校保健管理

夜間学級の生徒に学校が保健管理や保健事業を実施している程度は、各学校により実情を異にするが、全く何の処置も講じていない学校が二校ある。夜間学級に通う生徒は、その家庭が貧困であるのみならず、彼等は昼間労働に従事しているため、心身の疲労の激しいので、夜間の就学に際しては特に健康管理に積極的な努力を払わねばならない。夜間学級が保健事業として実施している年間行事は、X線検査、健康相談、歯科予防措置、寄生虫卵検査、寄生虫駆除、トラホーム予防措置等である。

(第九表)

夜間学級年間保健事業

実施回数		1 回	2 回	3 回	無
区分					
X 線 検 査		2			3
健 康 相 談		3	1		2
歯 科 予 防 措 置		2			3
寄 生 虫 卵 検 査		1	1		3
寄 生 虫 駆 除		1	1		3
トラホーム予防措置		2		1	2

方法の不合理、(2)長時間労働と夜間労働、(3)公的時間と私的時間の不明確、(4)作業の過重と不適当な作業、(5)作業環境の不良、(6)工場の立地条件、(7)事業所の無理解、(8)労働による疲労度等が通学に対する阻害条件となるのは当然である。しかしながら夜間学級に通う中学生が昼間の義務教育を履修することが出来ないのは、その根底に家庭経済の貧困という大きな問題が潜んでいるからである。今日就学奨励の爲にとられている国家的施策としては、生活保護法による生活扶助や教育扶助および文部省令「学令児就学奨励規定」による就学奨励補助等があり、地域的には教育委員会の就学奨励費や育友会等による援助がある。憲法には義務教育の無償が唱えられているが、生活の保障を裏付ける政治的、経済的、教育的諸力を結集した抜本的な国家の総合政策が打ち出されない限り、夜間学級の生徒を昼間の義務教育に移行させることは至難と言わねばならない。とは言え、彼等が不就学や長欠者から一歩前進して夜間学級に通うようになったことは、誠に喜ばしいことに違いないが、彼等が更に昼間の義務教育を受けることが出来るように、義務教育の完全実施を可能ならしめる生活保障の問題を考えることが先決問題である。

不就学生徒や長期欠席者に対する改善の策としての現行夜間学級制度においても、これが勿論理想の状態において運営されているのではない。例へば夜間学級の担当教師から教育委員会に対しては、次のような要望事項が調査結果の上にも表われている。すなわち、

- 一、教員手当の増額を希望するもの (四校)
- 二、夜間授業担当者の給与の公平 (一校)
- 三、夜間学級に対する教員定数の配置 (一校)
- 四、教材費の自主的使用 (一校)
- 五、学用品の支給を遅滞なく (一校)
- 六、体育用具の市費による購入 (一校)

七、給食実施の完備

(三校)

八、暖房費、湯茶費の支給を充分に (一校)

その他、夜間学級に通学する生徒の側からも色々と希望が述べられている。彼等が夜間学級の授業に対して述べている希望のうち、その主なものを挙げてみると、男女生徒とも「授業時間の延長」を希望するものが最も多く、次いで「学級内の融和」を望む等、教育効果に関連する事項が要望されている。その他「学年別の単式授業」や「図書購入」など勉学への意欲が涙ぐましいほどに示されている。第一表は生徒の夜間学級に対する希望事項を示したものである。

(第一表)

夜間学級に対する生徒の希望

希望事項	男	女	計
1. 授業時間の延長	7	6	13
2. 学級内の融和	1	7	8
3. 図書を増やして欲しい	3	4	7
4. 各科目毎の学年別授業をして欲しい		7	7
5. もっと真面目に授業して欲しい	1	6	7
6. 時間厳守	5	2	7
7. 静 粛	1	2	3
8. 考える余裕がない	1	2	3
9. 給食の献立の改善		2	2
10. 仕事を探して欲しい		2	2
11. 運動用具を備えつけて欲しい	2		2
12. 現状で満足している	2		2
13. 設備の改善	1	1	2
14. 病気の治療もして欲しい(医務室)	1	1	2
15. 欠席者に就学奨励して欲しい	2		2
16. 先生を増員して欲しい		1	1
17. 裁縫を教えて欲しい		1	1
18. 運動場に照明をして欲しい		1	1
19. 運動時間を勉強に			

このほか夜間中学生は雇用主、家族、市長等に対しても、第二表において示すような希望事項を表明している。

(第二表)

雇用主、家族、市長への希望

	希望事項	男	女	計
雇用主へ	給料について	5	3	8
	労働時間について	1	4	5
	失業保険加入		1	1
家族へ	生活力をもって欲しい	3	1	4
	兄弟が生活費を家へ	1		1
	就学を理解を	3	3	6
市長へ	学校の設備充実	3	3	6
	環境浄化	3	3	5
	生活保護の適正		2	2
	不就学者撲滅		1	1

重を再認識させる警句として示されている。ここにレヴィ的な立場から集団力学の展開が要求されているように思われる。

以上の調査結果から明らかにされたように、夜間学級に学ぶ中学生にとっては、先づ何よりも彼等が就学出来る前提条件としての生活の保障が確保されることが必要であると共に、夜間学級と雖も、その教育効果をより一層充実したものに整備されることが必要であり、夜間学級のあり方に対する無言の抵抗や教育技術に関する工夫の必要や警告がこの調査結果のなかにも発せられていることを感ずるのである。即ち結論的に言えることは、「夜間学級において

夜間学級に於て学んでいる中学生のこの素朴なる希望条件のなから、我々は彼等が希求している教育集団のあり方を学びとる必要がある。即ち、第一は、教育のあり方が、社会過程としての存在意義をより効果的に発揮することを求めているように思われる。第二は夜間学級に於ける教師と生徒からなる人間集団を集団力学的に常に検討し、より効果的な社会工学を適用することにより、教育効果を上昇せしめる必要に迫られているように思われる。例えば第一の類型を示す言葉としては、「裁縫を教えて欲しい」とか、或いは「仕事を探して欲しい」など、常に彼等が生活している社会との関係に於て教育が展開されてゆくことを願っている。この意味に於てデュローイの思想がもう一度顧られなければならない。また第二の類型としては「学級内の融和」とか「欠席者の就学奨励」という希望事項が教育集団における人間関係の比

は、学令児童生徒の就学ならびに学習を阻害する社会的諸条件ならびに社会心理的条件を排除するために、学校の場合に応用された社会事業活動を強化して、謂ゆる学校社会事業的効果を挙げることが必要である」ということを改めて深く認識せねばならないことを、この資料が示しているということである。

Sasabe Taketoshi

On the Life of the School Kinds labouring by Day and attending the Secondary School by Night

Résumé

Since the close of the war the economic conditions of Japan have shown unprecedented progress in each field and the social order has likewise been almost as much re-established as it should be. There is, however, one serious problem yet unsolved and forsaken in a tight corner of Japanese economy the one on how to deal with school boys and girls of long absence and non school attendance.

Circumstances do not help them take even compulsory education regularly besides attend night school; for they belong either to the stratum in need of social protection or to the borderline stratum just touching the other.

In this respect, we may well say that such a purely educational measure as the enforcement of compulsory education is hand in hand with grim realities of living which, unsubstantiated by social security, stand in its way to fulfillment.

This research intends both to report the actual state of night school pupils and to the grasp a key to the matter in hand by re-acknowledging correctly the educational, economic and social conditions with which they are confronted.

We feel it essential to give School Social Work for the life of the school kinds labouring by day and attending the secondary school by night.